ワールドステイクラブ二十五周年に寄せて

鉄 砲 伝 来 秘 話

初代理事長

ワールドステイクラブ 25 周年、おめでとうございます。NPO 法人となった最初の理事長として心からお祝い申し上げ、ますますのご発展を心より祈念いたします。この機会に何かお話をということですので、古い話ですが、お祝いの言葉とさせていただきます。

ワールドステイクラブ会員が訪れた国々は、世界にたくさんありますが、私は中でもポルトガルに興味がありました。かつて国別勉強会でポルトガル会を作り活動もしました。ポルトガル人は、大航海時代の末期に日本へも来航しています。関西地区懇の皆さんには、昨年 10 月の例会でバスコ・ダ・ガマがインドへ到達した話を聞いていただきましたが、今回の話はその続編です。

彼らはその後も東へ勢力を伸ばし、1543 年（天文 12 年）中国船に便乗した 3 人のポルトガル人が種子島に漂着しました。これがポルトガルと日本の最初の結び付きでした。種子島の若い領主、種子島時堯はポルトガル人が持っていた品物の中で、特に鉄砲（火縄銃）に興味をもちました。

彼はこれを二丁買い求め、近隣の大名たちにも隠すことなく披露しました。さらに、部下の刀鍛冶の棟梁、八板金兵衛に命じその複製品を作らせようとします。棟梁が銃を分解して調べてもその作り方が分からなかったのが、銃身の根元のネジを刻んだ栓でした。銃身の中に火薬と弾丸を入れて発火させる訳ですから、根元の栓はその力に耐えられるものでなくてはなりません。それまで日本にネジというものがなかったので、その作り方はポルトガル人に教わるしかありません。棟梁は娘の若狭に因果を含め、その後寄港したポルトガル船の船長の嫁として送り出しました。

その船は日本近海を回って貿易をする船だったので、何年か経ってまた種子島に寄港しました。棟梁の娘も喜んでその晩実家で家族と再会し、ネジの作り方も覚えてきたと話したのですが、翌朝早々彼女が疫病にかかって急死したとして葬式が営まれます。夫も一目死に顔が見たいと言うのですが、疫病で顔が崩れてとても見られない、さらに疫病が皆にうつったら大変だという理由で、棺の蓋をしたまますぐ埋葬してしまいます。船長は不審に思いながらも出航し、実家では一転して祝宴が開かれたことでしょう。なおこの若狭の墓は、種子島家の菩提寺である本源寺の近くの刀鍛冶一家の墓地の中にあり、数年前私も種子島を訪れた際に探し当てて、お参りしたことがあります。

種子島では以来数十丁の火縄銃が作られたそうですが、製造・販売の中心はその後堺に移り、多くの武将が競って買い求めました。NHK の大河ドラマ「麒麟がくる」でも、若き日の明智光秀が鉄砲の威力に驚く場面がありましたが、誰もがその威力に取り付かれたのでしょう。中でも織田信長は最も多くの鉄砲を有し、長篠の戦いで武田の騎馬集団を鉄砲で打ち破りその優位性を証明したのはご存じの通りです。

種子島火縄銃
愛知万博ポルトガル館
展示

当時ポルトガル人は、日本のみならず東洋の各国に火縄銃を伝えて回ったのですが、それがその後わずか二・三十年の間に、何百挺から千を超える数の鉄砲が国内に行き渡ったのは日本だけで、日本の技術力の高さが偲ばれます。

WSC 仲間とポルトガル旅行